

春の筑紫路

——能古・志賀島・大浦・深江・可也の山——

若 浜 汐 子

(一)

四月の潮風を切つて私を乗せた小さい汽船は、小波も立たない博多灣をすべるやうに北へ北へと進む。目指す地は万葉卷十五の遣新羅使人達の歌、及び卷十六の「志賀白水郎」の歌によつて名を遺す志賀島である。

九州北部に散在する万葉遺跡を尋ねたい希望を永年持ちながらその機会を得ず、今度九州地方の白路歌会へ出席の旅の寸暇を割いて白路同人の石井和男氏の案内で、志賀島と深江地方を探訪することの出来たのは望外の満足であつた。

志賀島は周廻約二里位、博多灣の北端を外海支海と分つ「海の中道」の西北端にあつて干潮の時は陸続きとなつてしまふ。

丁度鎌倉の江の島のやうな島で、やはり橋が懸つてゐる。博多から船で約四十分位、「海の中道」を縦断してバスも通つてゐる。遣新羅使の一行は、筑紫館に宿つて、海上にこの志賀島を眺めつつ歌を作つてゐる。

船は東南岸についた。漁家と商家と混じつた町並である。

南岸の小高い丘に志賀神社がある。ささやかな神域であるが、右手に海の中道が夢のやうに尾を引き、左は茫々と霞み渡る玄海灘を一時にをさめてゐる。疲れた心のいこひ所には絶好の佳境である。

丘を下りて先程の船着場を通ると漁夫らしい人々がしきりに竹を割いてゐる。漁業の傍らのアルバイトだらうか。附近の校庭はうつつたうしい程に櫻の若葉が萌えてゐる。

る。卷五の憶良の歌「妹が見し櫻の花は散りぬべし吾が泣く涙未だ干なくに」を思ひながら、ふり仰ぐ木梢に花はまだ見えず、黄色い実が房々と熟れてゐる。地上にも一ぱい落ちてゐる。今日の紀念に家へ持ち帰つて播いてみようといくつかを拾つた。

島の南岸に沿うて西へ進むこと数丁、海岸迫る道の傍に例の「淡倭女王」の金印出土地といふ紀念碑が建つてゐる。金印は田の畦から出たと聞いてゐたが、その辺にはそれらしい面影もなく、緩い傾斜の畑が背面に続くのみである。此印にも最近真疑が云々されてゐるさうだが、ともかくも関心を誘はれる地である。博多灣の中央を占めてゐる能古の島は船中では終始眺め通して来たが、ここに來て漸く私の脳中で万葉の歌と結びつき始めた。

海沿ひの道は坦々と続く。渚には折々小波がきらめく。紺青の海が南国の爛熟した春の陽光の下に静まりかへつてゐる。農耕の人影が稀に見え、時々牛がのどやかに鳴いてゐる。

後方に緑を湛へた山々は「志賀の山甚くな伐りそ荒雄らがよすがの山と見つつ俣ばむ」と歌はれた山であらう。この歌の解釈

にも諸説があるが、いづれにせよ還らぬ荒雄を偲ぶ妻子らにとつて見過し難い山であつたことは事実であらう。

・「志賀白水郎」の歌は十首あつてその左註が詳しい事情を伝へてゐる。志賀の漁夫である荒雄は官命ではないが、老友の為にその請に従つて対馬へ食糧を送る輸送の役を引受けたところ途中暴風雨に遭つて沈没してしまつた。妻子等は悲しさのあまり十首の歌を作つたのが、卷十六の歌だという。又、これは愼良が妻子らに代つて作つた歌だとも伝へてゐる。どの歌もその詠まれた土地で鑑賞味解する時は一層切実であるやうに、やはりこの十首の歌も、志賀の島山を目なかに仰ぎ、玄海の色を遠く望み、湾上の能古島を眺めやる時、実感は強く迫る。

(二)

南岸をやや西に廻るあたりの丘に元寇の時の蒙古兵の供養塔が建つてゐる。先年蒙古の徳王が建てたものだが、もうその周囲は荒れ果ててゐる。丘は屹立して海に迫り所狭き迄に老松が繁つてゐる。南方に先程よりやや遠のいて能古島が見える。「沖つ

鳥鳴とふ船の還り来ば也良の埼守早く告げこそ」外一首に歌はれる也良の埼はその最前端で、陽ざしのせるか松の陰影も手にとるばかり鮮かに見えわたる。「荒雄らは妻子の産業をば思はずる年の八歳を待てど来まさず」とあつて、もしかしたらと万一のぞみをかけつつ能古島を眺め暮した妻子の心情はまことに哀れ深い。西方に薄く霞んで見えるのは、遣新羅使人達の泊つた唐泊のあたりであらう。西北方には博多灣の口を扼する女界島がボツンともの淋しく浮いてゐる。太平洋の海の色を見馳れてゐる者には春色深いとはいへ、玄海灘の色はたまらなく哀愁を誘ふ。

この辺から更に歩を北に向けるなら「荒雄らが去きにし日より志賀の白水郎の大浦田沼は不棄しかるかも」の歌で高木市の助先生が「大浦田沼」に擬して居られる勝馬の地はさして遠くもないらしい。この「大浦田沼」は諸註書を見ると種々の説が行はれてゐて、大体は、土地と見る説と、別の意味にとる説とに分れる。高木先生が昭和十年、実地に志賀島を踏査された時の考証を万葉集総釈に書いてゐられるがそれによれば、この勝馬地方に「大浦」の小字も残

つてゐて、住民は多く農を営み、且つ故老の話では大浦附近は山の狭間になつてゐて沼地に近い水田が多いといふ現状より推して、往古もさうした沼に近い水田であつたと想像することも出来ないことはないと言つてゐられる。

この日の予定ではそこ迄ゆけないので残念ながら断念した。石井氏は地図と比べて私に細かい説明を一わたり加へてくれたが、やがてそそくさと地図をしまひ始めてしきりに時計をにらめてゐる。さつきの船着場から香椎へ行くバスに乗る時間を計つてゐるらしい。私の足の遅さでは普通よりよほど時間を見て貰はねばならない。まだ一時間余りありますが、といひながら出立を促す態である。十二、三町の距離を一時間見てゆくなら私にだつて多すぎるが、少しゆつくりしたいと思つたので、名残は盡きないが丘を下つて元の道を引かへす。帰り道も亦殆ど人に会はない。福岡市を去ることいくつもないこの土地に何といふ人の少ないことだらうか。併し、万葉遺跡が都市の拡張や發展につれてあとかたも分らぬ程になつてゆくのを惜しむ者には、いつ迄も志賀島は今のまゝでおきたい。船着場あ

たりはそろそろ遊覧地めいて、水族館などもあり、夏季は海水浴場にもなるらしいが、かういふ豨腰？の上にも古跡の保存はどうか忘れないで欲しいと思ふ。

帰りのバスは海の中道を一気に走る。この辺りは今駐留軍が飛行場を使用してゐる。所々いかめしい検問所があつて往還の者を検べてゐるが、バスは木戸御免といふ形でまっしぐらに砂塵を上げて走る。白砂青松の清らかな道を走ると思つてゐた憧れは無惨にもこの白い砂埃にまかれてしまつて、ただもうむせつぽくて仕方がない。旅人の歌からいくつか見える香椎瀧もバス疾走の窓からでは一かうに曲がない。

夜は香椎に病院を経営される原志兎太郎博士の御宅に泊めていたとき、久瀧をのべあひつつ夜更くる迄語り合つた。原博士に上代文学会を御紹介したら、直に會員に御参加下さつて、限りなく有難かつた。

(三)

翌日は昨日と同じく石井氏の案内で深江へ赴く。深江は巻五に見える鎮懐石の歌に現はれる地名である。鎮懐石のいはれは万葉長歌の前の序文によつて詳しいが、古事記・日本書紀及び筑前風土記・筑紫風土記等にも明記されてゐる。諸書はい同じであるが要約すれば神功皇后の新羅征討の際御懐妊中であつたが、石を御裳に挿んで鎮懐とされ、劉旋の後に出産されたといふので

ある。万葉集及び筑前国風土記等には石の大きさ、重量、形状等を詳しく記入し、且つ万葉にはその伝説を作者に伝へてくいた人の名まで挙げてある。形は大体大きい方は一尺二寸余、小さい方は一尺一寸程の卵形であつたらしい。

私はこの石に深い興味を抱きつつ深江を訪れた。この他は明治になつて志摩郡と怡土群を合して糸島郡となつたが、万葉には「怡土郡深江村子負原」と出てゐる。福岡市と唐津との中間に當る。駅は新装をこらした明るい駅で古びた建物を想像して来た者には、意外であつた。道を左にとつて畑の中をゆくこと数丁、海沿ひの街道に出るあたり、左手に小高い丘があり、子負原八幡といはれる社がある。丘の下に鎮懐石の歌を刻んだ碑が建つてゐる。中程は崩れてゐる石階をのぼりつめると、狭い丘上に小祠が建つてゐる。問題の石はそこに祀られてゐるのかと思つたら、伝説の石は何時の頃からかすで無く、その代りのものが祀られてゐるさうな。鰐口を鳴らしてお賽銭をあげ、中を窺うてみたが階の下からではさつぱり分らない。

私の期待ははげれたが、考へてみれば、さういふものが千数百年後の昭和の今日迄そのまゝに伝はるものもあるまい。況して石としてはさして大きいものでもないしさういふ信仰を伝える石であつてみればどこへか持ち去られることも有り得ることであらう。

あらう。

丘は桜の七分咲といふところ、この爛漫たる花の下には一人の酔ひどれもない。唯万葉を愛し、その伝説を慕うてはるばる訪れた我々だけである。

海上は昨日に劣らぬ静けさである。野村望東尼の流された姫島も指呼の間に見える。遣新羅使の人々が懿々本土に離れる日も近づいて碇泊した引津浦は、崎山に隔てられて見えないが、その時の七首の中に歌はれてゐる「草枕旅を苦しむ恋ひ居れば可也の山辺にさ牡鹿鳴くも」とある、可也山は途中の車中からもよく見えたが、この辺りからも遠望出来る。富士に似た、小さいながら美しい山である。

ここはもう肥前国に近い。肥前の万葉遺跡も亦私を招くのであるが、約束した前原の糸島高校の歌会に出席せねばならないので残念ながら思ひ切つた。海岸を歩いてゐるうちに石井氏が時計を見て慌て出した。発車にギリギリだといふ。切符を買つておくから後から早くいらつしやいと云つてどんどん馳け出してゆく。仕様がないので私も夢中で走つた。昨日と大ちがひである。それでもやつとのことですべりこみといふところ、車中ではさすがに汗が流れて困つた。